

Another Story in Olympic Games

もうひとつのリオ五輪

リオ五輪の卓球会場を飾るのは三英の「infinity」(インフィニティー)という卓球台だ。
青い瞳という意味を持つ新しいカラー「レジュブルー」が8月のリオデジャネイロに映える。
創造的な色と言い、木製での芸術品のような脚部と言い、
そこにはメイド・イン・ジャパンのこだわりを感じる。
五輪で使用される三英の卓球台の発想から製作までを追いかけてみた。

アスリートを支える

五輪の 卓球台

前編

メイド・イン・ジャパンのこだわり。
三英の「infinity」ができるまで

取材=今野昇
covered by Noboru Konno

写真=奈良武 & 江藤義典
photographs by Takeshi Nana & Yoshinori Eto

三浦慎

(株)三英・代表取締役社長

国際派として知られる三英の三浦慎社長。国際卓球連盟との直接交渉を重ね、厚い信頼を得てオフィシャル・サプライヤーとして卓球台を提供するという大役を担う。日本人らしい見事なデザインと繊細な物作り。五輪の卓球台「Infinity」に込めた熱い思いを語ってもらった。

「より創造的なものを提案していく。日本の三英から世界の三英に認知してもらおうことが私の使命であり、夢です」

和のテイストも入れた日本らしい部分とブラジルらしい部分と融合できたらいと思っ

三浦慎社長は千葉県流山市の本社で、笑顔で迎えてくれた。

リオデジャネイロにも幾度も足を運び、現地の空気を盛り込んだような五輪の卓球台「Infinity」(インフィニティ)を完成させた人物だ。

五輪で使用される卓球台という名譽と誇り。それは世界最高レベルの用具の証でもある。しかも、卓球台は見事な曲線を持つ木製の脚に「レジュブル」の天板を組み合わせた斬新なものだ。五輪の卓球台に決まるまでの経緯、こだわりを伺った。

● リオ五輪が迫ってきましたが、三英はオフィシャル・サプライヤー(公式用具供給メーカー)として卓球台を提供しますね。1992年バルセロナ五輪に続いて2回目のサプライヤーです。

の台
を
支
え
る
五卓
輪球

三浦 オリンピックは、世界のトップアスリートが参加し、そこで使われる卓球台も最高の卓球台が選ばれると思っております。サプライヤーとして卓球台を提供することには大変誇りを持っており、製作することにもやりがいがありました。

1992年のバルセロナ五輪の時も卓球台を供給しましたが、当時はその後どう波及させていくのかという営業的な戦略はありませんでした。20年以上経っている現在、国内だけでなく海外でも勝負しないと企業として大きくなれないし、飛躍できない。そのためにもオリンピックに卓球台を提供したいと思っていました。少しでも今回のオリンピックで認知していただければうれしいですね。

● もともと三英は材木店からスタートしたと聞きました。材木店だったから卓球台、ということですか。

三浦 三英の前身は、1940年に設立された松田材木店で、東京都台東区で材木屋として材木の販売をしていました。もともと材木を卓球台メーカーに卸していたのですが、昔の製法だと板が反ってしまう。板

が反らない作り方はないのかと投げかけられるうちに、自分のところで作るようになったのが、卓球台を作るきっかけです。

最初は得意としていた柱を材料としていましたが、のちに桂材特有の根強い反りを回避し、バウンドが均一の桂材の長所を活かせる合板を作り上げました。その後卓球台の販売会社、三英を設立し、自分たちの手で作った卓球台を自分たちで売るようになったのです。それが54年前の1962年です。三英設立から1992年バルセロナ五輪で使われるようになるまでは30年間かかったことになりました。

● バルセロナ五輪からも20年以上経っていますが、なぜリオ五輪でサプライヤーとして名乗りを上げたのでしょうか。

三浦 オフィシャル・サプライヤーになるという今回の構想はロンドン五輪の前からありました。実はロンドン五輪にも提供しなかったのですが、我々が国際卓球連盟(ITTF)にアプローチした時にはすでにサプライヤーは決まっていました。完全に遅れました。そこで、「次は絶対採用していただく」と動いていました。ロンドンが終わる時点で、すでにインシヤルデザイン(初期デザイン)を見ていただくまでは構想をまとめていました。決まったのはロンドンが終わって1年後くらいですね。決まった時点では、「ひとつ終わった」感

じでしたけど、同時に「これから始まる」という気持ちでした。

● 五輪用の卓球台を考えていく中で、何がポイントになったのでしょうか？ 東日本震災の被災地の木を使っていると聞きましたか……。

三浦 構想の段階でブラジルに通って現地を視察した時に、多くの日系人の方と接しました。その時に、日本人がブラジルへ移住した時の話を伺いました。移住された方は現地で大変苦労されましたが、当時移民の中で流行ったのは宗教と卓球だったそうです。卓球はちょっととしたスペースがあればできるし、気軽にできたので多くの移民の方が生活の中での楽しみにしていたんですね。その話を聞いた時に、リオ五輪に卓球台を提供できて良かったと思いました。

その中で、卓球台を通して和のテイストも入れた日本らしい部分とブラジルらしい部分と融合できたらいと思っただけです。また、2011年に東日本大震災があったので、その被災地への思いや復興への思いを入れたかった。最初から脚はスチールではなく木製のもので作りたかった。木製で作りたいたいと思いましたが、意匠(デザイン)、および強度として、果たして木製でできるのかという問題はありました。

今回オリンピックに向けて斬新なものを作りたかったので、澄川伸一さんというデ

ザイナーにお願いしました。澄川さんは有名な工業デザイナーで、ソニーにいた時にウォークマンなどをデザインした方で、卓球台のような大きなものをデザインしたことがなく、初めての時から興味を持っていただきました。曲面を巧みに使う真摯なデザインをされる方なので、うちの卓球台にぴったりのデザイナーだと思いました。

今回は復興の願いを込めて、岩手県宮古市という震災エリアで育ったブナ材を使いました。実は三英は卓球台だけでなく、公園関係の仕事もしているので木を多く使用しています。そして使用するだけでなく、永続的にきちんと入手するために木を育てていく活動として植林も行っています。

● デザインから実際に試作品を作っていくうえで苦労した点はどこでしょうか。

三浦 実際に作ってみると木製の脚がスプリングのように動いて、台を叩くと振動が止まらなかつた。これには参りましたね。特に澄川さんの最初のデザインは脚が華奢で、素晴らしいデザインでしたが、振動の問題がありました。その部分を改良したので、素晴らしいデザインでしたが、振動の問題がなくなりました。その部分を改良したので、形も改良しました。厚さを60mmから80mmに変えたり、形も改良して、何度も試作を繰り返して、振動を抑制しました。

脚を木製で作るのはコスト的な面でも合

製の脚は経時変化(時間とともに変化していく)をして、使っているうちに反ってきたりする。そうすると合板で作らなければいけない。合板で、なおかつ複雑なデザインを具現化するためには、相当な技術を要します。最終的に、木の曲げの技術で世界的に有名な天童木工(山形)さんに行き着きました。合板で成形しつつ、見事なカーブを持つ脚は、天童木工さんでしかできないものでした。

新しい生命」というメッセージを「レジュブル」という色に重ねて発信するにしました

● 木製の脚もさることながら、「Infinity」の特徴は、「レジュブル」という色ですね。卓球のルールでは基準範囲内であれば、ブルーでも、グリーンでも、赤でも良いことになっていますが、今回のレジュブルはブルーにもグリーンにも見えますね。鮮やかな色です。

三浦 卓球台の色は、日本ではブルーですけど、ヨーロッパではまだグリーンとブルーが使われています。グリーンとブルーの間の色を作ること、どちらのユーザーにも買ってもらえる色を作りたいです。

「新しい生命」というメッセージを「レジュブル」という色に重ねて発信することにしました。三英としては選手が見やすい色、そしてテレビでも映える色を考案し、東日本大震災からの復興の中で、「新

「選手が五輪の舞台で最高のプレーができる卓球台にしたかった」



◆「日本の卓球台を創った男」と言われる松田英治郎



◆1962年の設立当時の三英(当時三英商会)は、卓球台を車の屋根に乗せて運搬していた

2度目の五輪。その舞台で使われることの名誉と誇り

英と云えば、日本を、いや世界を代表する卓球台のメーカーと言って良いだろう。

過去に、世界選手権では4度(1991年千葉・2000年大阪・2009年横浜・2014年東京)のオフィシャル・サプライヤーになり、五輪では1992年バルセロナ以来のサプライヤーとなった。卓球関連会社と言っても、ラバーやラケットを製造しているわけではない。卓球台を専門に製造し、会社としては、公園施設・遊具、スタジアムベンチ、フィットネスマシンなどの製造・販売を手がけている。

三英の前身は、1940年(昭和15年)に設立された松田材木店(創業者・松田英治郎)で、戦後の卓球ブームが到来した頃から、卓球台メーカーに材木を卸していた。卓球台の天板用に桂材を使用した特殊合板を考案したことで、自ら卓球台を製造するようになった。

1957年(昭和32年)には千葉県流山市に卓球台専用工場を建設し、反りや狂いの少ない日本初の合板による卓球台を作った。そのことから松田英治郎は「日本の卓球台を創った男」と呼ばれている。

それまでの桂材を使った単板の卓球台は、湿度や湿気、乾燥具合によって木が反ったり、隙間が空いたりした。狂いの少ない合板の卓球台は均一なパウンドを保証し、選手たちにとってはプレーに専念できる卓球台だった。

そして1962年には卓球台の販売会社として「三英」が設立されている。1950年代から日本は空前の卓球ブームになり、荻村伊智朗、田中利明という世界チャンピオン

が輩出され、競技としても「黄金時代」を迎えていた。成長を続けた三英は、1979年ピークを迎えた。

その後、1986年頃からマスコミなどで「卓球はネクラ」というイメージが喧伝されたが、三英は1991年に世界選手権千葉大会での公式サプライヤーとなり、この大会から卓球台の色は濃いグリーンから鮮やかなブルーに一気に変わっていった。

そして三英にとって初の五輪の卓球台は、1992年バルセロナ大会だ。五輪のサプライヤーは、卓球台とボールの二つだが、選手たちが安心してプレーでき、安定した品質のものを相当数供給しなければいけない。五輪でのコマースヤル行為は禁止されているので、五輪サプライヤーと言っても黒子に徹することに。唯一、「五輪で使われた」という名誉と誇りを持つことがサプライヤーに与えられる。

三英にとっては大きな名誉だが、「メイド・イン・ジャパン」の卓球台がリオ五輪で使用されるのは、日本の卓球ファンにとっても大きな誇りと言えるだろう。



◆卓球にとっては2大会目の五輪となった1992年バルセロナ大会は、三英卓球台にとって初の五輪だった

い生命」というメッセージも込めた色を探る中で「レジュブルー」に決めました。

会社の中でプロジェクトチームを作った。最初は40種類の色を集め、今回のテーマも加味し、最後は「レジュブルー」に落ち着いたのです。あのレジュブルーは光によってブルーにも見えるし、光によってはグリーンにも見えます。もちろん選手にも打ってもらい、プレーしやすい色という配慮もしています。卓球台の均一なパウンドも含めて、卓球台の天板は命です。選手が五輪の舞台で最高のプレーができる卓球台にしたかったのです。

◆三浦さんの卓球台へのこだわりとは何でしょうか。

三浦 今回の「Infinity」は今までと違う作り方をしてできたのが台です。澄川さん、天童木工さん、そして三英の内部の人間が協力して満足できる卓球台になりました。

私がモットーにしているのは、常に新しいもの、創造的な活動です。前例がないものを作りたいし、気持ちが前向きな活動をしたいと思っています。

◆日本で作られた卓球台がリオ五輪の卓球の舞台で、照明の中で浮かび上がるのは想像するだけでもワクワクしますね。三浦さんの夢とは何ですか？

三浦 これで日本選手がメダルを獲得していただけたらうれしいですね。どこの国の選手が勝っても感動的だけど、それが日本選手だったらさらにうれしい。

祖父(松田英治郎)が作った会社ですが、材木屋でいけば会社が今あったかどうか分からない。その後、父(三浦敏明)が組織



五輪の卓球台

◆流山市市民総合体育館に展示している三英の卓球台。リオ五輪とはほぼ同じ仕様の作りとなっている。木製の脚部は見事な曲線を描いている

的な会社を作ってきた。私ができることはそれを礎として、より楽しいもの、より創造的なものを提案していくことでした。

◆「日本の三英」から「世界の三英」に認知してもらおうことが私の使命であり、夢です。

◆2020年には日本に五輪がやってくる。その時にはぜひ「日本製の卓球台」を置きたいものです。

三浦 東京でも三英の卓球台を使ってもらえるように努力をしています。私もピンポイント程度は打ちますが、卓球はやると本当に楽しいスポーツですね。リオ五輪をテレビで観て、「卓球台もキレイで楽しそうだね」「卓球というスポーツも楽しそうだね」という人がひとりでも増えていたら非常にうれしいですね。

◆ありがとうございます。

五輪メダル候補の水谷隼(全日本チャンピオン)は「今回、卓球台が三英なのでホームのような気持ちです」と語る。すでにナショナルトレーニングセンターには4台の「Infinity」が設置され、日本代表選手は練習に励んでいる。

光り輝く五輪の舞台に浮かび上がる「Infinity」。その舞台で最高のプレーを見せ、表彰台に上る日本選手をみんなが見たいと願っている。そのシーンを観て、卓球ファンは感動の涙を流すだろう。そして、その喜びと感動で特別な涙を見せる人たちがいる。それが卓球台を作った三英の社員と社長なのだ。

(文中敬称略)

リオ五輪使用卓球台 [infinity]



◆塗装が終わった天板。レジュブルーの板が重ねられる。白線を入れる前の状態だ



◆レジュブルーの塗料がカーテンのように天板に降り注ぐ。これでムラのない表面が塗装される



◆接着・プレスを終えた天板表面の仕上げ・チェック工程。卓球台の命とも言える天板が一枚一枚チェックされる



◆天板の製造工程は製品により20から30ほどある。写真は多層構造による天板材料の組み合わせ工程。この後、板を張り合わせる接着・プレス工程に回される

[天板製造]
三英・北海道足寄工場



■澄川伸一 デザイナー
[すみかわしんいち]
ソニーのウォークマンなどを手がけた工業デザイナー

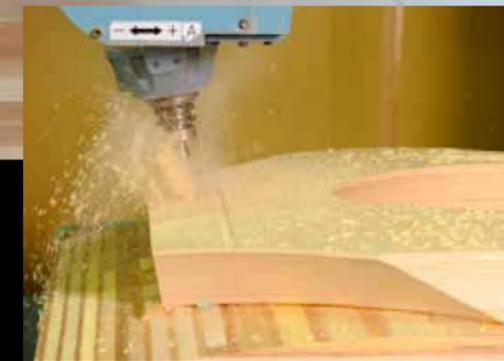
[木製脚部製造]
天童木工



◆仕上げの塗装とクリアと呼ばれる仕上げ。まるでアートのような木工品のような脚部の完成



◆接合した脚部をヤスリをかけ、美しい曲面に仕上げている



◆まるでバウムクーヘンのような積層の木の塊を削りだしていく工程。NC加工と呼ばれる

アスリートを支える
五卓輪球の台

アスリートを支える

五卓の輪球の台

なぜか心を落ち着かせ、
コートに立つ時に
静謐な気持ちにさせる
レジユブルー

——北海道足寄より

これはもはやスポーツ用具ではなく
芸術品だ
——山形県天童より